

〔国内研究報告〕

信越国境地域山村の 歴史的な生活文化および 大規模な自然災害後の文化財救出と 文化復興に関する研究

白 水 智

- 〈目 次〉
1. 栄村の概要
 2. 栄村との関わり
 3. 史料整理・調査
 4. 文化財保全活動
 5. 生活文化の体験
 6. 聞き取り調査
 7. 近世における争論係争地の現況調査
 8. 苗場山の山名調査
 9. 児童一人の分校の実態についての観察
 10. 実現できなかった事項—焼畑の再現
- 終わりに

筆者は昨年度（2016年度）、本学の国内研究員規定に基づく1年間の研究休暇取得を許可され、長野県栄村に滞在した。研究課題等詳細は下記のとおりである。

[研究課題]

信越国境地域山村の歴史的生活文化および大規模自然災害後の
文化財救出と文化復興に関する研究

研究期間：2016年4月1日～2017年3月31日

研究場所：長野県下水内郡栄村

受け入れ機関：栄村教育委員会

本稿では、栄村における諸種の調査・研究・体験について、その概要を報告をさせていただきたいと思う。

1. 栄村の概要

栄村は、新潟県中魚沼郡津南町に接する長野県最北端の村である。当地のイメージを描くキーワードを挙げるとすれば、①豪雪地、②秘境山村、③長野県北部地震の3つになる。以下簡単に説明しておきたい。

まずは①の豪雪地であることについて。長野県は全体としてみれば決して豪雪地ではない。むしろ雪のほとんど積もらない地域が多い。しかし栄村は日本海に近い県内最北端の村であり、気候的には新潟県と類似しており、毎冬多量の積雪を見る。直近の12年間を調べると、最高積雪は多い年で395センチ（2005年度）と4メートル近くに達する反面、わずかに112センチ（2015年度）という年もある⁽¹⁾。しかし、少雪の年でも太平洋側と比べれば豪雪と呼べるレベルであることは変わらない。村の玄関口にあたるJR飯山線の森宮野原駅には、昭和20年（1945）に記録したJR駅構内の最高積雪記録である785センチを表した標柱が立てられている。

次に②秘境山村を管下を含むことについて、栄村は面積271.66平方キロメートルの広大な領域をもつが、村の行政的中心は、北端を西から東に流れる千曲川（信濃川）沿いの低地部にある。しかし図1を参照していただければわかるとおり、それより以南の地域が面積的には大半を占めている。そして苗場山と鳥甲山に挟まれた中津川流域の溪谷地帯は、通称「秋山郷」と呼ばれ、江戸時代から秘境山村として知られていた。越後国塩沢町の文人であった鈴木牧之は、この秋山を文政11年（1828）に訪問して『秋山記行』という見分記を著している⁽²⁾。現在でこそ自動車道路も通じて、秘境

の面影は薄らいだが、山村としての生活環境は現在も変わらず残っており、豊富な山菜やキノコ類をはじめ、山の幸に彩られた生活が続けられている。苗場山は標高2145メートルとさほど高山ではないが、頂上が平らで湿原が広がっており、その特異な景観とあいまって「日本百名山」の一つに数えられている。秋山郷は、その長野県側からの登山拠点としても賑わっている。

次に③長野県北部地震についてである。2011年3月、東日本大震災が発生したが、その翌日（正確には19時間後）未明、長野県北部地震が発生した。被災範囲は限定的であったが、震度6強の本震1回、震度6弱の余震2回によって、栄村と津南町が大きな被害を受けた。日本中が東日本大震災の巨大津波とそれにとまう原発事故に震撼しているさなかであったため、大きく報道されることはなかったが、現地では深刻な被害が生じていた。そしてこの被災がきっかけとなって、筆者自身の栄村との関わり方にも大きな変化が



森宮野原駅前に立つ「日本最高積雪地点」の標柱

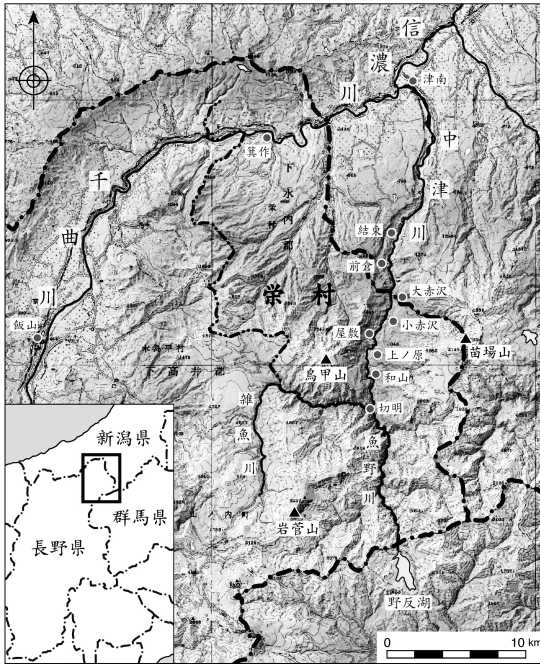


図1 栄村とその周辺図

(白水編著『新・秋山記行』高志書院・
2012年掲載の長谷川裕彦作図を改変)

訪れることになった。
その事情については、
後述したい。

2. 栄村との 関わり

筆者が長野県栄村に
歴史調査に通うようになっ
たのは18年前の1999年秋
のことである。翌年には大
きな史料群である島田汎家
文書と出会い、その整理と
悉皆撮影を約7年に亘って
続けた。その作業と並行し
ながら、2006年度からは総合地

球環境学研究所（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構）の共同調査プロジェクト（湯本貴和代表「日本列島における人間-自然相互関係の歴史的・文化的検討」の一環（中部班）として、これまで縁のなかった理系・文系の多分野の研究者とともに栄村での共同調査・研究を開始した。5年間にわたる研究プロジェクトであったが、毎年度末には現地栄村で会場を借りて報告会を開催し、その年度の最新成果を地元の方々にまずお返しすることを続けてきた。⁽³⁾

その最終年度末に当たる2011年3月にも現地での報告会を行ったが、それからわずか1週間後の3月12日未明、栄村域を震源とする大地震が発生し、同村は甚大な被害を受けた。以後、栄村で廃棄されようとする文化財を救出するボランティア活動を開始することになり、民具学、考古学の研究者と

もに「地域史料保全有志の会」（以下、保全の会と略称）を結成して、現在まで年に8回から10回の活動を継続している。栄村における文化財保全活動は、これまでに延べ2000人を超える多数のボランティアの方々に支えられ、緊急の文化財救出からその整理、そして歴史文化館設立にともなう展示など、村の文化面での復興に関わるさまざまな活動を担うことになった。これが発災直後の緊急救出ばかりでなく、その後の復興に向けての保全活動継続に関するモデル的な成功例として、はからずも世界的高い評価を受けることになった。日本私立学校振興・共済事業団からは、「激甚災害時の文化財保全とその後の整理活用に至る方法論的研究—長野県北部地震で被災した栄村をモデルとして」の研究課題に対して、2013年度から2015年度まで3年間にわたり学術研究振興資金を交付され、救出文化財の整理や活動報告書の刊行などを行うことができた。

こうした経緯を承けて、2016年度の国内研究計画では、1999年以来続けている山村地域の歴史的生活文化調査と大規模災害後の文化財保全活動の2つをテーマに研究を行うことにした。

昨年度は現地に長く滞在しなければ実施できない史料の整理・調査や関連資料の収集、聞き取りデータの収集、生活文化の体験、震災後の文化財保全活動などに重点を置いた。これら収集史料の詳細な分析は今後順次実施していく予定であるが、長期に亘る滞りで、かなりの量の調査・体験ができたことは大きな成果であった。以下、個々の項目ごとにその概要を述べていきたい。

3. 史料整理・調査

(1) 栄村青倉地区の区有文書整理

栄村のうち、旧水内郡の一部にあたる青倉地区は（栄村は旧水内郡水内村と旧高井郡箕作村・志久見村が合併して成立している。旧水内村は近世村として



青倉区有文書の整理作業

は、森・青倉・平滝・白鳥の4ヶ村から成る)、千曲川左岸の段丘上に位置する。古くから越後と長野を結ぶ善光寺街道が通り、交通上の1つの拠点となっていた。

同地区は2011年3月の長野県北部地震において多大な被害を出し、数多くの民家が損壊したほ

か、集落公民館も倒壊している。この公民館の中には近世以来の多数の区有古文書が伝存されてきていたが、震災後、土埃にまみれたそれらの古文書は地元住民によって救出され、全国各地からの支援によって新たに建設された公民館に保管されることになった。

この青倉区有文書を整理し、地域の歴史文化の掘り起こしに役立てようという地元の動きがあり、この史料整理を担当することになった。これまで栄村での史料調査に携わってきたメンバー2名とともに調査団を結成し、公民館に泊まり込んで計8回、22日間にわたる調査を実施した。本年3月22日には調査成果の報告会と報告書の引き渡しを現地公民館で行い、終了した。

(2) 栄村青倉地区旧蔵の米持稲実家文書

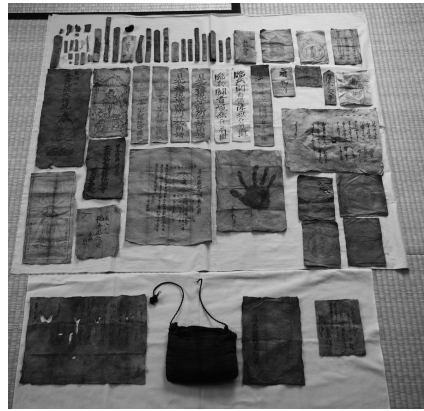
また、同地区に関しては、結婚して長野市へ転出された女性のお宅に残されていた古文書と出会う機会があり、その整理も開始した。この文書群の中からは、栄村では貴重な江戸時代ごく初期の古文書が2点発見され、これについては、調査結果を本年3月に開催した第6回の文化財保全活動報告会において成果展示を行った。

その他の同家文書については、整理・調査を継続している。

(3) 福原国吉家文書

栄村小赤沢地区には、当地域の代表的民家形式として文化財になり、保存

民家として残されているお宅がある。現在は文化施設として公開されており、見学者が誰でも自由に中へ入れるようになっている。この保存民家の仏壇裏から、2011年8月に麻またはイラクサ（アングイン）と見られる袋が見つかり、その中には細かく折り畳まれた御札類を中心とする書類が詰め込まれているのが確認された。当面細かく調査する時間がなかったため、この史料はそのまま保存民家の半天井の裏に古文書整理用の封筒に入れて置いておくことにした。



福原国吉家文書の整理

昨2016年4月、保存民家は茅葺き屋根の修復が行われ、職人が1週間ほどにわたって出入りして工事を行っていた。半天井裏に保管してあった史料に紛失の不安を感じたため、これを同地区の福原国吉家（現在は国吉さんは逝去されて、奥様の京子さんがお住まいである）宅にお預けすることにした。この保存民家は、もともと福原国吉家のお宅であったためである（なお、同家に残されてきた古文書については、すでに2000年～2001年にかけて調査を行い、全点マイクロフィルムに撮影のうえ、目録も作成している）。

今回長期滞在の機会を得たので、この福原家にお預けした布袋入りの史料についても、調査を実施した。調査は2017年1月31日に行い、布袋に詰め込まれていた煤けた御札類を全て取り出し、写真撮影のうえ、整理した。

（4） 廣瀬博明家文書

廣瀬博明家文書は、2004年と2005年に村教育委員会からの依頼により調査を行った史料群である。その後、同文書を保管してあった土蔵が2011年3月の長野県北部地震で大破したため、これを地域史料保全有志の会で救出した



廣瀬博明家文書の整理作業

経緯がある。

同文書群は、襖の下張文書なども加えれば数万点にも及ぶとみられる村内でも随一といっている大きな史料群である。廣瀬家は、旧水内郡森村に所在した有力家で、村の名主を務め、幕末から近代には栄村域はもとより、近隣の津南

町・十日町方面にまで広大な土地を集積し、大地主となった。栄村では、旧高井郡域に関する古文書は多数遺されてきたものの、旧水内郡側の史料が断片的にしか見つかっていなかったため、これまで歴史があまり明らかにされてこなかった。実際、『栄村史』においても、「堺編」（旧高井郡側）は厚みがあるが、「水内編」は薄い本となっている。その意味では、廣瀬家文書が発見され、震災後全点が救出されたことは、村や近隣地域にとって、文化的に非常に重要なできごとであった。

震災後、保全の会の活動の中で、この文書群を整理し、目録を作成する作業が続けているが、あまりに膨大な文書群のため、その作業は未だ数分の1程度の整理状況にとどまっている。しかし、整理は着実に進めており、昨年も保全活動の中で一定度の成果を上げることができた。具体的な進捗状況については、保全の会の活動のたびごとに作成・発行している報告書の中に記載している。

（５） 飯山市桑名川地区の区有文書

栄村に隣接する飯山市との間では、震災後、保管場所に困っていた村の古文書を文化施設に預かっていただくなど、多くのご縁が生まれた。そうした関係から、栄村の白鳥地区から間近い飯山市桑名川地区の古文書を調査させていただく機会に恵まれた。

桑名川地区は、千曲川沿いの集落で、公民館には古い箆笥に収められた多



桑名川区有文書の調査



桑名川区の役員の皆さんと古文書を調べる

数の区有文書が遺されている。栄村との比較検討の素材として近隣地区の史料調査は有効であり、とくに千曲川舟運や善光寺街道での交通・流通でつながりのある同地区の史料は、興味深いものがある。

昨年度は、5月と11月に調査の機会をもち、区有文書の全体像を把握する作業を行った。本年3月には、同地区で講演もさせていただき、地域住民の方々に区有文書概要と歴史的史料を遺し保全していくことの重要性をお話しさせていただいた。

4. 文化財保全活動

(1) 栄村の保全活動の特徴

すでに前項でも触れたが、2011年の震災以来、栄村での文化財保全活動を続けている。これは「地域史料保全有志の会」(保全の会)という有志団体を結成しての活動として行っているが、まさに栄村の歴史文化に関わる地域史料(歴史・民具・考古)を保全しようという有志による活動である。当会では、文化財を救出し、保全して後世に遺すとともに、それらを活用して地域文化の見直しや復興を図ろうという目的をもって、年に8回から10回程度

の現地活動を行っている。

こうした大規模自然災害後に当該地域の文化財を救出（レスキュー）する活動は、阪神淡路大震災後に神戸大学を中心とする「歴史資料ネットワーク」が結成されて目覚ましい成果を上げてから全国で注目されるようになり、その後各地で自然災害が起こるたびに同様の趣旨をもった団体が結成されるようになった。

栄村での活動も、こうした流れに触発されて起こしたアクションであったが、他とは異なる特徴が多々あり、近年、全国の文化財レスキュー活動の中でもとりわけ注目されるようになった。

他地域の資料ネットワーク団体のほとんどは、地元県での災害後レスキューを目的とし、県内の大学や博物館・資料館などの文化機関のメンバーが運営・活動の主体を担っている。しかし栄村での文化財レスキューは、私自身の長年にわたる栄村での歴史調査（フィールドワーク）によるご縁が契機となって始めたものであり、首都圏を中心とする栄村とは離れた遠隔地の者が運営や活動の中心となっている。また、県内の文化機関の積極的な支援がない中、手弁当で独自の活動を展開してきた。

そして何よりも注目されているのは、地域に密着したかたちで救出文化財の活用段階にまで至っている点である。他地域の文化財レスキューは、あくまで大規模災害後の緊急的な救出と当面落ち着くまでの保全作業が中心であり、救出した文化財を生かして本格的な活用まで実践している団体はほとんどない。管轄県全体の災害を視野に入れての活動であれば、それもやむを得ないところではある。その点では栄村の活動に特化している保全の会は有利な条件にある。

そもそも文化財を救出し、保全するのは何のためであろうか。それは単にモノだけを遺すのではなく、モノにまつわる文化的営為や記憶、生活仕事を再評価し、後世に生きた形で伝えていくためである。しかし、一般的には「とりあえず救出しておく」ことに主眼が置かれ、本来の目的である救出文化財を生かしての地域文化の活性化までは手が届かない場合が多い。栄村で

は、幸いに村教委・村公民館の全面的な協力を得ながら、文化財を地元で再評価し、今後に向かって生かすための活動を展開することができたのである。

私自身は、この保全活動に中心的に関わり実践する中で、今後全国各地で起こりうるであろう大規模災害に関して、その後の文化財救出から整理・活用までを1つのモデル化する試み・研究を模索してきた。これは、すでに私学事業団の学術研究振興資金申請プロジェクトにおいてテーマとしてきたことであり、幸いにも2012年度から2015年度まで3年間採択され、その評価も年ごとに上昇してきた。

とはいえ、本活動は、3年間で収束できるものではなく、さらに今後長い期間をかけて目的達成のために実践を続けていかななくてはならない性質のものである。その意味では、まだあくまで過程の中にあるといわなければならない。

(2) 栄村文化館「こらっせ」の開館

本活動の1つの象徴といえるのが、保全の会からの提案に沿って村が設置した「栄村歴史文化館」(愛称:こらっせ)の開館である。文化財の仮保管場所となっていた栄村志久見地区の旧分校(東部小学校志久見分校)校舎を耐震改修し、村初めての本格的な歴史文化施設にする提案が受け入れられ、2015年4月に仮オープン、昨2016年8月に本格オープンという日程が決定されていた。

この歴史文化館に特徴的なことは、村内文化財の保管・展示・研究を目的とし、村公民館としての機能も併せもつ施設として構想されたことである。それは小規模村のゆえに専任の学芸員を雇用する余裕のない中で、公民館長と公民館主事を常駐職員として配置することで対応しようとする人事計画の側面が重要であったが、同時に震災後の救出文化財整理の過程で、それらが地域文化を見直し活性化させる公民館活動と親和性が高いことに気づいたことも要因である。すなわち、救出文化財を活用する手段として公民館活動の



すべて参加者の手作りで行った開館に向けての展示作業

場を生かそうとする考えであった。

そして文化財の救出も整理もすべて保全の会参加者（その中には首都圏からの大学教員・学芸員・大学院生・学生・教育委員会職員などのほか、一般村民・市民も含んでいる）の手弁当と手作業で進めてきた経緯からして、今回の歴史文化館オープンに際しての展示も、展示専門業者を入れずに、すべて手弁当・手作りで実践しようということになった。すなわち、歴史文化館の本格オープンには、文化財の救出から活用に至る過程において、1つの画期となる重要な意味合いをもっていたのである。予算も資金もごく限られた中で、各地の博物館や資料館の学芸員として活動してきたメンバーが智慧を集め、工夫をして、手弁当で展示を完成させることそのこと自体が、全国に先駆けた文化財保全活動のあり方を示す実践例（モデルケース）としての意味をもっていたことになる。そしてこれは私自身の榮村における文化財保全に関わる実践的研究としても、重要な機会であった。

ゴールデンウィークの活動において、展示に関する具体的な打ち合わせを行ったのを皮切りに、7月の活動を経て急ピッチで1階と2階の展示室、計7展示エリアの準備を行い、8月に入ると深夜までの作業を行い、同6日に無事オープンを迎えることができた。この



こらっせ開館式典

の間、正式な保全活動以外にも、時間を作っては個人で開館に向けた解説シート作りや展示台の製作その他の業務に携わった。また開館後も展示の改善、微調整を行いながら、来館者への対応も含めて実践的な研究を進めた。

歴史文化館オープンまでの諸作業は、自由に時間を使える状況になければ不可能であり、まさに今回の国内研究における1つの成果であったといえる。

5. 生活文化の体験

1999年秋に初めて栄村秋山地区を訪問して以来、毎年の調査活動を通して中近世以来の当地における生活文化を文献史料をもとに研究してきたが、今回の滞在の目的の1つに、そうした生活文化を実際に自ら体験してみることがあった。

2006年度以来5年間にわたった総合地球環境学研究所プロジェクトの共同研究では、民俗学・地理学・林学・生態学などの諸分野の専門家とともに栄村、とくに秋山地区の生態系サービス利用のあり方について調査してきたが、年に何回かの断片的な滞在では、生活文化の体験をする時間的余裕はなかったのである。今回長期滞在の中で、植物・動物・菌類など自然資源の利用について、多様な見聞と体験をすることができたのは、大きな収穫であった。

(1) 植物利用

現地に着任したのは2016年4月初頭であった。豪雪地にしては記録的な少雪の冬から明けたところであったが、それでもまだその時期は一面の雪景色であった。その中で、すでに早く芽吹いたのは里に近いエリアで顔を出したフキノトウであった。その後、5月には当地名産の山菜が一斉に生え揃い、ワラビ・ゼンマイ・フキ・コシアブラ・ヤマウド・トリアシショウマ・イラクサ・葉ワサビなどが採り頃となった。地域住民に迷惑をかけないために、本格的な採取は遠慮せざるをえなかったが、道路敷の範囲内で一人分の山菜は各種採取することができた。それらはまさに地元の食文化として利用され続けてきたものたちである。村外・県外から多数の採取者が入り込み、地元住民との間でトラブルになるような事情についても、直接村民から話を聞くことができた。また、豪雪地の奥山地域の山菜はアクが少ないと言いつわされてきたことも実際に体感できた。ワラビなどは重曹や灰を使用しなくても、熱湯でわずかに煮沸すれば食べられるという話を聞き、半信半疑でその通りにやってみたところ、驚いたことにアクが抜けて食べられるようになっていた。

6月には当地の住民自身も楽しみにしているタケノコの出る季節になっ



地元の方に教えていただきながら採った山菜

た。ここでいうタケノコとは孟宗竹のタケノコではなく、人の指ほどの細くて密生するネマガリタケのタケノコである。これを藪に潜って採るのが当地の恒例であり、地区によっては、稲作を終えての農休みとして「タケノコ採りイベント」を集落で行うところもあ



小赤沢地区のタケノコ採り行事に参加させていただいた



職人によるヤマブドウ工芸品の製作現場で聞き取り調査

る。私自身は、小赤沢地区のタケノコ採りに参加させていただくことができ、実際に密生する藪にもぐって採取した。その身動きのできなさ、服装の注意の意味など、タケノコ採りの現実を体験的に理解することができた。

また食料以外でも、ヤマブドウの蔓を用いた籠編みも、工房を見学させていただき、実際に作業に関する聞き取りや写真記録を取ることができた。

(2) 動物利用

動物は、タンパク源としての食料のほか、毛皮や薬用に利用される内臓など、さまざまに利用価値がある。実際に食文化として体験できたのは、クマ・イノシシ・シカ・カモシカである。このうちクマ・イノシシ・シカは、これまでの調査の際にも実食する機会があったが、カモシカに関しては、猟師が一番食料として狙ったのはカモシカだとの話は以前から聞いていたものの、実食する機会はなかった。カモシカ（正式にはニホンカモシカ）は現在は国の特別天然記念物であり、狩猟は厳しく禁止されており、まして食することはできない。これまで十数年にわたって山奥の秋山地区に通ってきたが、



道路ではしばしばカモシカに出会う（11月6日）

一度も食べる機会はなかった。

ところが、昨年、秋山地区の民宿で、近隣の猟師が捕獲許可を得て獲ったカモシカがあるが、食べてみるかとの話をいただいた。またそのあと、捕獲した猟師の経営する民宿でも実食する機会を得た。いずれもた

またま現地にいたから声をかけていただいたもので、長期滞在していなければ口にする機会はなかった。その意味では、国内研究で滞在していたおかげで体験できた事例といえる。

ニホンカモシカは名前とは裏腹に、ウシ科の動物である。そのため、肉もシカとは異なり、牛肉のような香りと食感だと教えられていた。実食してみると、確かにシカとは全く異なり、牛肉に似た味と香りであった。貴重な機会をいただけたことに感謝している。

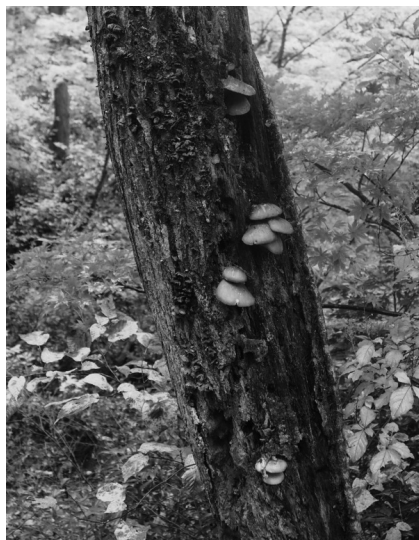
また、クマから採れる「クマの膽」も、未だ乾燥途中のものを間近に実見することができた。古くから薬用品として名高い「クマの膽」であり、乾燥の終わった（製品化）されたものは見たことがあったが、乾燥途中のものを見たのは初めてであった。

（3）菌類の利用

菌類といえば、キノコである。とくに秋には多様なキノコが出盛りとなる。2016年は天候の関係か、キノコの出方が例年と異なっていた。ナメコは時期が遅れ、ムキタケ（地元ではカタハと呼ぶ）はごくわずかしかなかつた。その他のキノコについてはほとんど採取する機会がなかったが、いずれにしても、たくさん実食する機会はなかった。

それでもムキタケやマスタケ・ナメコ・キノメリカサタケは道路際や林の中で自ら採り、調理して実食することができた。マイタケ・クリタケは天然のものを地元の方からいただいて食する機会が与えられた。また採取することはできなかったが、ヤマブシタケ・エゾハリタケは生えている状況を確認することができた。

通常の都市生活ではお目にかかることすらない山の幸を観察し、実際に味わうことができたのは、貴重な体験となった。



枯木に生えるムキタケ(地元名カタハ)

(4) 牧之の道歩き

鈴木牧之は、近世後期に越後国塩沢町で越後縮を扱う商家を経営していた商人で、同時に名の知れた文人でもあった。この鈴木牧之の著作として名高いのが『秋山記行』である。江戸の著名な戯作者である十返舎一九の依頼で珍道中物を執筆しようと、信濃国の山奥、現在の栄村秋山地区を訪問した際の記録である。秋山地区の歴史を調査する際の必須文献であり、また民俗学的にも貴重な記録となっている。

この鈴木牧之がどのようなルートで秋山を歩いたか、現在の自動車道とはかなり異なるルートを地元の方が研究し、あるいは言い伝えをもとに整備しつつある。クマ出没の恐れがあり(村内ではしばしばクマ目撃の注意情報が有線放送で流れていた)、単独行は避けていたが、11月8日、地元の方の案内を得て、この「牧之の道」を2ヶ所歩くことができた。

十数年にわたる秋山地区調査の経験はあったが、毎回車での往き来であ

り、なかなか地区内をゆっくり歩く機会はなかったが、長期滞在のおかげで天候とも相談しながら自由な日程設定ができ、初めて集落間をつなぐ山道を実際に歩いてみる事ができた。

(5) 豪雪体験

栄村を特徴づけるものの1つが豪雪である。長野県でも最北端に位置し、日本海にも近い栄村は、隣接する新潟県中魚沼郡津南町、十日町市などと同様、毎年2メートルを超える積雪に見舞われる。首都圏でこのような大雪が降ったならば流通・交通は完全に途絶し、生活が麻痺することは明らかである。ところが、この豪雪の中で、栄村での生活は通常どおり行われている。除雪機も自動車もなかった歴史時代においても、栄村地域は豪雪の中で多様な工夫をして雪との折り合いをつけ、ときには雪を利用して生活を持続させてきた。このすさまじい雪の世界は、体験してみなければわからない。身をもって体験して、初めて理解できる史料内容もあると考えた。その意味で、一冬の豪雪体験は貴重なものとなった。

一例を挙げるならば、カンジキという道具である。柔らかい雪の中を歩くときに、長靴を履いただけでは腰まで埋まってしまって、とても進むことはできない。しかしカンジキを付けることで、踏み込んだときに埋もれる深さはかなり軽減され、比較的容易に歩くことができる。降り積もったばかりの

新雪の中では効果が薄いですが、その場合にはさらに大きなスカリというカンジキを重ねて付ける。これによって通常ならとても歩くことの不可能な雪中の移動もできるようになる。

また、2月末から3月になり、降雪が一段落してくると、気温の下がった朝などは雪面が固く凍り



雪に埋もれる宿舎

つき、長靴やカンジキ履きでどこまでも歩けるようになる。この状態を「凍み渡り」と呼んでいる。凍み渡りになると、無雪期には岩や溝の凹凸があったり、あるいは他人の田畑などで通ることのできなかった場所が、まったく自由に、自在に歩き回れる場所へと変貌する。こうした体験を経て初めて理解できる史料がある（これらの体験に関わる歴史的問題については、日本山岳文化学会への投稿論文を準備中）。

国内研究で滞在中の冬の積雪は、例年より少し少ない程度であったが、それでも秋山地区での観測（小赤沢地区）では、最大275センチメートルに達した（2月13日）。柴村を退去した3月末日でも、未だ170センチメートルの積雪の状態であった。今回初めて体験できた豪雪は、長期滞在の賜物であった。

6. 聞き取り調査

国内研究の大きな目的の1つに、古老からの聞き取りを行うことがあった。前述した鈴木牧之も文政時代に現地の古老から聞き取りをしている。人の平均寿命が現代よりはるかに短かったとされる江戸時代であるが、牧之は秋山は長寿者が多いと書き記しており、実際、80歳を越える複数の老人から貴重な話を聞いている。現在も秋山には長寿の老人が多くおり、私が借りていた宿舎の向かいにも97歳の老人が独り暮らしをしていた。奥深い山村地域である秋山にお住まいの80～90代の方々を対象に、数名の方からかつての山村の生活の様子、山の名称などについてお話をうかがうことができた。お話をうかがった方々は以下のとおりである。

屋敷地区	山田 勇 (97才)	2016年6月15日
	山田さと (93才)	2017年3月26日
	山田由信 (82才)	2017年3月28日
小赤沢地区	山田義輝 (97才)	2017年1月28日
	福原孝平 (86才)	2017年1月27日
和山地区	山田初雄 (93才)	2017年3月27日

7. 近世における争論係争地の現況調査

現在の栄村管内で江戸時代に起きた大規模な争論に、巢鷹山争論がある。越後国の36ヶ村と現栄村で当時の箕作村・志久見村との間で起きた大規模争論である。当時、箕作・志久見の両村内には、鷹狩りに用いる鷹の子を巢から捕獲するための山（巢鷹山という）があった。この山は、幕府によって厳しく入山や利用が制限されており、両村の者たちが「巢守」と呼ばれる管理人に任命されて、山内を巡回しては違法伐採などがないか確認していた。そこに隣接する越後国から多数の住民が徒党を組み、薪などの大量伐採に踏み込んできたのである。幕府の法廷に持ち込まれた大争論であったが、結果的に享保15年（1730）に判決が出され、信濃側の勝訴に終わった。この争論については、すでに2007年に口頭報告をしているが、関係史料もよく残されており、当時の山論の実情が具体的にわかる事例として注目される。

国内研究の中で、この争論の係争地および周辺地域の地理的な位置関係、絵図に描かれた近世の国界を確認する作業を行った。近世絵図に描かれた国界線は、現在の県境線と若干のずれがある。どのようにして現在の県境線が決まったのかにも関心があり、地形的な規定性を含めて検討すべく、写真を撮りながら現地を巡検して回った。



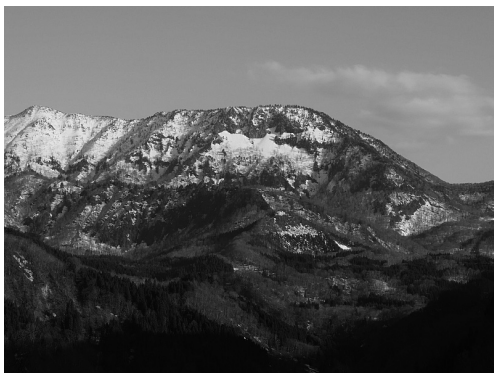
大道山付近から鳥屋峰、苗場山を望む

8. 苗場山の山名調査

私が滞在した秋山地区は、苗場山と烏甲山という、ともに2千メートルを超える山々に挟まれた溪谷地帯である。その一方の苗場山は、栄村と新潟県津南町にまたがって存在し、秋山地区を代表する名山となっている。標高2146メートルを誇るが、頂上は平坦で、池塘と呼ばれる水たまりが無数に存在し、湿原状を呈する。この特異な景観と相俟って、同山は「日本百名山」の1つに数えられている。2014年12月には、栄村と新潟県津南町とが共同で申請していた「苗場山麓ジオパーク」が日本ジオパーク委員会から正式に認定を受けた。ジオパークとは、「地球の成り立ちを観察できる地形や地質、そこに育まれた生態系と私たち祖先の歴史文化を守りながら体感して楽しく学ぶ場所」(苗場山麓ジオパークHP)、つまり地学的・生態的・文化的に稀有の価値を有する地域を認定するもので、ユネスコが世界的に展開している事業である(同ジオパークは、世界ジオパークではなく、国内認定のジオパークである)。そして、長野・新潟両県にまたがる町村が申請した苗場山麓ジオパークは、まさにその名が示すとおり、苗場山という名山を核として構成されている。

ところが、この「苗場山」という名前は、秋山や栄村地域の史料を見ている限り、江戸時代まではほとんど出てこない。前近代の絵図では、別の山名が書き込まれている。もっとも、「苗場山」の名がまったく出現しないわけではなく、前述した鈴木牧之の著作には「苗場山紀行」という文章があり、地域によっては、古くから「苗場山」と呼んでいたことがわかる。

そもそもこの「苗場」というのは、山頂に苗代田のような水たまりの点にする景観に由来する呼び名である。稲の豊作を祈って、苗場山に参拝したという話も聞く。しかし、考えてみれば、秋山地区は秘境の山村として知られていた場所であり、農業も焼畑耕作などが主流で、稲作は江戸時代にはほとんど行われていなかった。つまり稲作にまつわる信仰の地ではなかったわけ



秋山方面からは「幕山」と呼ばれた苗場山。幕を垂らしたように見えることからその名がついたという

である。とすれば、秋山の人々が背後に聳える山を指して「苗場」と呼ばなかったのも不思議ではない。では、苗場という名前はいつからどのように呼ばれるようになったのか、また秋山ではどのように呼んでいたのか、その理由は何か、が問われなくてはならない。

この点の調査も、国内研究の課題の1つであった。そして、90才代後半の方からの聞き取り調査によって、その事情がかなり明らかになってきた。これについては、今後発表していく予定であるが、地元の方々もほとんど知らなかった事実が明らかになった。これも本国内研究における滞在成果の1つである。結論を先取りしていえば、苗場山は近世には秋山において「幕山」と呼称されており、「苗場山」とは呼ばれていなかった。「苗場山」と呼んでいたのは、稲作が盛んであった新潟平野方面の人々であった。同じく栄村と新潟県十日町市との境にある「天水山」が、近世には信州側からは「三法山」と呼ばれ、越後側からのみ「天水山」と呼ばれていた可能性がある。このように、大きな山になると、同じ山でも反対側の山麓とは異なる呼称で呼び習わされる例があったことがわかる。今回は、苗場山を「幕山」と呼んでいたことを知る97才の老人からその証言を得られたのが大きな収穫であった。

9. 児童一人の分校の実態についての観察

栄村には2つの村立小学校がある。1つは千曲川沿いの平地にある栄小学

校の本校、そしてもう1つが栄小学校秋山分校である。この2つの学校は、2015年度まではそれぞれ独立した栄小学校と秋山小学校であった。

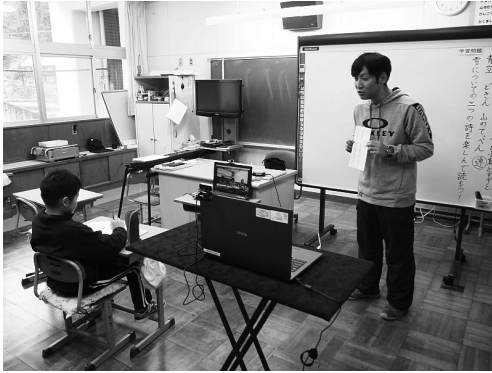
ところが秋山小学校では、昨年3月に児童1人が卒業し、残る在校生が1人のみとなったため、独立小学校から分校に変更された



分校から声をかけていただき、F君や先生方とソバ刈り体験をさせていただいた

のである。つまり秋山小学校は長い歴史に幕を下ろして閉校となり、新たに栄小学校の分校として再出発することとなった。そして、私の滞在した2016年度は、分校としてスタートした初年度に当たった。私が村教育委員会からお借りした宿舎はもともと秋山小学校の教職員用宿舎であり、校舎のすぐ裏手に隣接していたため、分校との密接な関係の中でさまざまな体験をすることができた。

秋山分校の在籍児童は、2016年度には4年生のF君1人であったが、スタッフは校長（本校と兼務のため、普段は不在）、教頭（秋山分校に常駐）、担任（秋山分校常駐）、技術職員（秋山分校常駐）、給食調理員（秋山分校常駐）の5名で、そのうち4名が常駐していた。実は2016年度末で教頭が定年退職となり、しかも3年間担任として赴任していた教員も異動になったため、2017年度からは新たな担任1人が教務の全てを担当することになり、大きく体制が変わった。教頭は村内出身の先生で、村の事情にも明るく、秋山地区の大半の住民とも既知の関係であったうえに、豪雪などへの対応にも不安はなかった。しかし新年度からは村内の事情を知らない他所からの新任教員が1人で校務の大半を担うことになったため、若干の不安を感じる状況となっている。



児童と担任の1対1だが、スカイプを通して本校の同学年生と一緒に授業。これも過疎地域の分校ならではの工夫として注目される

た時代からの状況を知悉していた複数の教員が勤務していた最後の年度であり、教職課程の一端に関わる者として、1年間をこの分校と関わりながら過ごせたことは、大変幸運であり、貴重な体験であったといえる。

分校の先生からは、しばしば学校行事に関わるお誘いをいただき、F君や分校の教職員の皆様とともに、それらに参加させていただいた。教育の原点ともいえる、1人の児童への教育の様子を目の当たりに観察することができ、またともに体験できたことは得がたい体験となった。

2017年1月18日には、分校の児童に地元の歴史に関わる話をする機会を与えていただき、当日は本校の4年生3名も秋山まで上がってきて、計4名の子供たちを相手に1コマの授業を行った。校長先生はじめ、教職員の皆様方のご理解のもと、こうした機会を得られたことは、何よりの貴重な経験となった。

10. 実現できなかった事項—焼畑の再現

秋山地区は、古くから焼畑農業を盛んに行ってきた場所である。奥深い山間地にある秋山では、狩猟の起源も古く、猟師が冬期の猟の際に集落から離

長野県は山間僻地の多い県であるが、現在では交通事情の改善で児童の遠距離通学（送迎）も可能となり、分校は他に1つも存在しない。しかも児童数1名という分校は、おそらく全国的に見ても稀有の存在であろう。こうした諸事情を考えると、私の滞在した昨年度は、独立小学校であつた

れた宿营地とする山中の洞穴では、平安期に遡る遺物が出土しており、古代以来山の資源を生かす生活が行われていたことは間違いない。文献的には、鎌倉時代末期に当たる14世紀前半に狩猟や材木伐採などをして生活する人々が住み着いていたことが明らかになっている（「市河文書」）。近世になって記録が残されるようになると、当地では盛んに焼畑を行っていたことがわかってくるが、この地に暮らした住人たちが古代以前に起源をもつ焼畑農業を行っていたとみることも当然可能であり、その蓋然性は高いとみなくてはならない。

しかし、長い歴史をもつ当地の焼畑も、昭和30年代頃から次第に見られなくなり、現在は生業として行っている家は一軒もない。焼畑では、主に蕎麦や粟・稗などの雑穀を栽培していたが、近代以降秋山でも水田が拓かれるようになり、とくに第二次大戦後稲作は拡大・定着した。それとともに、雑穀生産の場であった焼畑は姿を消していく。

とはいえ、焼畑は当地を代表する農業文化として戦後まで残ってきたものであり、その技術的なノウハウも含めて、焼畑文化は後世に伝承していく価値と必要性がある。この点に関しては、すでに1990年代から市川健夫氏を中心とする地理学・民俗学の研究者グループが秋山郷の焼畑文化保存のために、毎年夏に「秋山郷常民大学」を開催し、その中で焼畑の火入れを行ってきた実績がある。この試みは長野県北部震災前の第17回（2010年）まで続けられていたが、主催者の高齢化もあり、震災後は開かれなくなってしまった。

焼畑の火入れは、あらかじめ何日に行うと予定を立てることが難しい。なぜなら焼畑地の伐採が終わり、1週間程度の晴れ間が続いたのを見計らって、前夜の夕立などがない時に天候との相談で行われるものだからである。従って、急に「明日の朝実施する」というような決定のしかたにならざるを得ない。現場の様子を記録保存するためには、ある程度の期間の滞在が不可欠となる。国内研究の期間はそれが可能なため、ぜひ滞在できる昨年のように焼畑の再現をしたいと考えていた。

地元組織を早めに立ち上げる必要を感じて、すでに4月段階から小赤沢地区の区長や教育委員会事務局長（小赤沢地区在住）に話をし、協力を取り付けていた。しかし、事務局長の急な交代（村長交代にともなう年度途中の人事異動）、焼畑予定地の草木刈り取りを行う時期の長雨など、計画を阻むできごとが次々に発生してしまった。8月上旬まで機会をうかがったが、結局焼畑を行うことはできなかった。これは昨年度もっとも大きな誤算であり、残念なできごとだった。今後また機会を作って、焼畑の復活に取り組んでみたいと考えている。

終わりに

上述のように、2016年度の1年間は何物にも代えがたい貴重な時間であった。現地に長く滞在しなければ得られない生活文化的な知見との出会いや体験が数多くでき、史料調査もじっくりと実施できたからである。具体的な研究

成果の発表は後日となるが、この1年の研究内容を生かせるように、充実した論考を作成していきたいと考えている。

このような貴重な機会を与えられた学校法人中央学院、中央学院大学はもとより、受け入れを快諾してくださった栄村教育委員会、栄村歴史文化館「こらっせ」職員の皆様、地域史料保全有志の会の皆様、そしてお世話になった地元の多数の皆様にご心から感謝申し上げる次第である。



お世話になった宿舎。
左は栄小学校秋山分校

〔注〕

- (1) 栄村ホームページより (2017年3月21日閲覧). <http://www.villsakae.nagano.jp/kinkyu/kinkyu.html#april>
- (2) 宮栄二校注『秋山記行・夜職草』平凡社・1971年. 宮栄二他編『鈴木牧之全集 上巻』中央公論社・1983年.
- (3) 中部班プロジェクトの研究成果は、以下の書籍にまとめている. 湯本貴和編, 池谷和信・白水智 責任編集『シリーズ日本列島の三万五千年一人と自然の環境史 第5巻 山と森の環境史』文一総合出版・2011年. 白水智編著『新・秋山記行』高志書院・2012年.

